

## 国際機関邦人職員リレーエッセー

### 第1回： 国際刑事裁判所書記局対外活動局国別分析ユニット勤務 藤原広人さん

[オランダ・ハーグより]

ハーグ(デン・ハーグ)の夏は、ときとして雲ひとつなく晴れ渡り、澄みきって乾燥した空気が心地よい日が続きます。北半球のかなり高い緯度にあるため、夜は11時近くまで日が沈まず、人々は長い黄昏時(twilight)を思い思いのやり方で過ごします。近くにはスケベニンゲン(!)という保養設備が整ったビーチがあり、仕事が終わってからのひと時を、浜辺のカフェでワインを飲みながらのんびり過ごすのも一興です。

今から140年近く前、ハーグに滞在したフランス人画家のフロマンタンは、この地が気に入り、次のように当時のハーグの町の情景を活写しています。

「デン・ハーグはオランダでもっともオランダ的ならざる都会の一つであり、ヨーロッパで最も風変わりな都会の一つである。ここには独特の雰囲気漂っていて、それがこの町の特別な魅力となっているし、この優雅なコスモポリタニズムの香気のゆえに、この町は人と人の出会いの場としてこの上ない役割を果たしている。…この町の広やかさ、清潔さ、ピトレスクでしゃれた眺め、ちょっと気取った優美さは、来客を歓迎するこの上なく洗練された物腰のように見受けられる。…加えて時折、特派使節が訪れる。それもあまりにも頻繁に、世界平和のためにやってくるのである。」(1876年出版、フロマンタン著(高橋裕子訳)「オランダ・ベルギー絵画紀行」より)



[司法と平和の国際都市ハーグ]

実際のところ、ハーグは過去いくつかの国際会議の舞台となり、1899年と1907年と二度にわたって万国平和会議が開催されました。1907年の会議では現代国際人道法の源泉の一つとなる「ハーグ陸戦規則」が締結されています。

現在「司法と平和の国際都市」(International City of Peace and Justice)の異名を持つハーグには、幾つもの国際裁判所が存在します。国際司法裁判所(International Court of Justice, ICJ)を初め、常設仲裁裁判所(Permanent Court of Arbitration, PCA)、旧ユーゴスラビア国際刑事裁判所(International Criminal Tribunal for the Former Yugoslavia, ICTY)、レバノン特別法廷(Special Tribunal for Lebanon)、そして、私が勤務する国際刑事裁判所(International Criminal Court, ICC)などです。

### [国際刑事裁判所での仕事]

2002年に設立されたICCはハーグにおける国際機関としては比較的新しい存在です。長年にわたり国際法関係者にとっての悲願であった、常設の国際刑事裁判所であるICCの使命は、戦争犯罪、人道に対する罪、ジェノサイドなどの重大な国際犯罪を犯した個人を、その地位に関係なく訴追、裁判し、もって世界における不処罰の文化(culture of impunity)を克服することにあります。

ICCは、捜査および訴追を担当する「検察局(Office of The Prosecutor)」、「裁判部(The Chambers)」そして、中立的機関である書記局(The Registry)という三つの機関から構成され、私が主管するCountry Analysis Unit (CAU)は、書記局の「対外活動局(Division of External Operations)」に属しています。司法機関であるICCのなかで、主に裁判所の政務関連の情報収集と分析を任務とするCAUは一寸独特の存在ですが、国家主権という国際法上の大原則と、個人への警察権の行使という、ある意味両者が最も鋭く対立する局面において活動するICCにとって、裁判所が現在の国際社会の中で置かれている位置、およびその活動が当該関係国の内政に与える影響を正確に認識し、適切な政策を立案・執行することは裁判所の活動の成否を左右する上で肝要です。

### [これまでの仕事・現在の仕事の魅力]

私自身は、これまでICTY(検察局)、ニューヨークのブット事実調査委員会(国連事務局)、そしてカンボジアのクメール・ルージュ法廷(捜査判事室)と、検察・捜査での仕事が長く、政務関係の仕事は実は今回が初めてなのですが、実際にやってみて裁判所の活動を俯瞰的に見る上で大変役に立っていると感じます。「正義の執行」という一定の目標に向かいひたすら邁進するといったこれまでの職務から、ICCによる捜査、訴追、裁判といった一連の司法手続きが、その対象となる国家やAUなどの地域のジオポリティクスにどのような影響があるのかといったテーマで分析することは勉強にもなるし、現実の国際政治における裁判所の役割や機能といったことを考える契機ともなり大変面白い作業です。



藤原さんが、どうして国際機関で働くことになったか、国際機関勤務のやりがいについて、もっと知りたい方は、国連職員NOW!(国連フォーラム)でのインタビューもご覧下さい!!

<http://www.unforum.org/unstaff/117.html>

### [今後の皆様へのメッセージ]

最後に、これから国際裁判所を将来の選択肢として考えておられる方、考える可能性のある方に向けてメッセージを送らせていただきます。国際刑事裁判制度は、まだ緒についたばかりでいまだに試行錯誤の面が多々あります。組織面でも様々なことが不明瞭であり、裁判所が将来どのような形をとっていくのか見通しがつきにくいところもありますが、これは裏を返すと、まだまだ個々人のもつ種々のアイデアが歓迎され、実現していく可能性を持っているということでもあります。ICCは、法律家だけではなく、捜査官や政務関係、そして人事、財政など、様々な専門家からなる多国籍集団です。この世界で自分の可能性を試してみたいという方は、どんどん挑戦していただきたく思います。ご関心のある方は、お気軽にご連絡をいただけると幸いです。